

「寝取られ亭主」と「男らしさ」

『赤と黒』第1部第21章「主人との対話」をめぐって

上杉 誠

「ですから、同じ一つのことで、悲劇的に見て悩みの種にすることもできれば、単純に考えて、愉快的見方をすることさえもできるんですよ。もしかしてあなたは物事を悲劇的に見すぎる傾向があるんじゃないかと？」

私たちが日常的に接する様々な報道が示すとおり、不倫という現象は今日において耳目を集め続けている。その現状は社会学的分析が示すとおりであるが²、同書が指摘するように、不倫という現象を指し示す語もそれらが使用される頻度も時代を通して変化している。婚姻制度に付随するこの現象をめぐる言説を通して、特定の時代と地域に特有の道德規範が明るみに出される。小説などの虚構の作品において不倫が語られる場合、不倫に対する振る舞いを通して、作品が描く社会における規範と人物たちがその規範に対して示す距離が問題になる。パヴェルの『小説の思考』が示すように、小説は、人間の行動を規定する道德規範と実際の行動のずれを問題にするのである³。

タナーの『姦通と文学』がルソー、ゲーテ、フロベールを通して論じているように、不倫——現代の用法での「不倫」という言葉が定着したのは1980年代であるため⁴、「adultère」の訳語として以下「姦通」を用いる——という主題はとりわけ18世紀後半から19世紀の小説作品において中心的な問題になっている⁵。この指摘は、本稿で取り上げる『赤と黒』（1830年）においても当てはまる。本作品において、姦通とその露見がもたらす顛末が、物語、とくに2部構成の小説の第1部の結構をつくる。ジュリヤンとレナー

¹ トルストイ『アンナ・カレーニナ』、第2巻、望月哲夫訳、光文社古典新訳文庫、2008年、162頁（第3部第17章）。

² 五十嵐彰、追田さやか『不倫——実証分析が示す全貌』、中公新書、2023年。

³ 「小説は〔中略〕、人間がそのように行動しなければならない仕方と、実際に人間が行動する仕方の間の違いについて考えるよう私たちを促す。」（Thomas Pavel, *La Pensée du roman*, Gallimard, coll. « Folio essais », 2014 [2003], p. 46.）

⁴ 五十嵐彰、追田さやか『不倫』、前掲書、22-24頁。

⁵ Tony Tanner, *Adultery in the Novel. Contract and transgression*, Baltimore, London, Johns Hopkins University Press, 1979, p. 12. トニー・タナー『姦通の文学 契約と違反』、高橋和久、御輿哲也訳、朝日出版社、1986年、31頁。

ル夫人の関係は、色男とよめく人妻という姦通の当事者それぞれの立場からの読解が可能であるが、本稿では、姦通における三角形のもう一つの頂点にあたる「寝取られ亭主」の役割をあてられたレナール氏に注目する。フランス語において、「コキュ (cocu)」あるいは「裏切られた夫 (mari trompé)」などの表現で示されるこの役割においてこそ、「男らしさ」が問題になるように思われるからだ。フランスにおけるギャラントリーを論じた著書において、クロード・アビブはモリエールの『女の学校』（1662年）を取り上げながら、「寝取られ亭主」に向けられる笑いの本質を次のように提示する。

無慈悲なまでのこの笑いはどこに由来するのだろうか？ あることを明らかにすることに由来するのである。世の中の面前に表れるのは、寝取られ亭主は自分の妻を所有するに至っていないということだ。社会秩序、法、教会によれば妻である。寝台においては、妻ではない。寝取られ亭主において愉快なのは、ファルスの威光の崩壊である。その証拠に、反対はまったく考えられない。裏切られた妻を笑うものはいないからだ⁶。

こうして、性的能力を発揮する権利＝義務の棄損を示す「寝取られ亭主」において、痛ましい笑いを伴いながら「男らしさ」が主題化される。アラン・コルバンらの監修による『男らしさの歴史 II 男らしさの勝利 —— 19世紀』が示す通り、19世紀において男性は自らの性的能力の発揮に過剰なまでに執着したが、同時に、その能力にまつわる失敗にも否応なく視線が引き寄せられた⁷。「寝取られ亭主」を通して示される「男らしさ」は、姦通を主体として行う「色男」が示す「男らしさ」に比べて、いっそう陰影をました形をまとうだろう。

⁶ Claude Habib, *Galanterie française*, Gallimard, 2006, p. 60.

⁷ アラン・コルバン、ジャン＝ジャック・クルティエヌ、ジョルジュ・ヴィガレロ（監修）『男らしさの歴史 II 男らしさの勝利 —— 19世紀』、小倉孝誠監訳、藤原書店、2017年〔原著2011年〕。とりわけ、性的能力の発揮を記録することに示された執着と不能の恐れについては、同書第3部第2章「性的エネルギーを示す必然性」（アラン・コルバン著）、第6部第1章「男らしさの要請、不安と苦悩の源」（同）を参照。なお、本稿で論じる「寝取られ亭主」という主題は『男らしさの歴史』全三巻に散見される。『男らしさの歴史 I 男らしさの創出 —— 古代から啓蒙時代まで』（鷲見洋一監訳、藤原書店、2016年〔原著2011年〕）所収の第6部第1章「民衆の男らしささまざま」（アルレット・ファルジュ著）では啓蒙期を舞台に、『男らしさの歴史 III 男らしさの危機？ —— 20-21世紀』（岑村傑監訳、藤原書店、2017年〔原著2011年〕）所収の第1部第3章「不安な男らしさ、暴力的な男らしさ」（ファブリス・ヴィルジリ著）では20世紀を舞台に、それぞれ「寝取られ亭主」が扱われている。

もっとも、先のモリエールへの言及からも明らかなように、「寝取られ亭主」の主題は、19世紀や『赤と黒』に限られることなく、フランス文学においては中世以来広く扱われてきた。西洋における恋愛の原形として名高いトリスタン物語も「寝取られ亭主」の物語とみなすことができる一方、同じく中世のファブリオではまったく異なる調子で——卑俗な笑いをもたらす調子で——姦通が繰り返し扱われている⁸。スタンダールと同時代を生きたといつてよいヴィニーは、1840年の日記に「モリエールについて」と書き始めた後、こう記している。

モリエールは、『コキュにされたと思った男』において、カルデロンにおけるスペインの夫たちによる名誉心の誇張を間接的に笑いものにしたいという願いがあったように私には思われる⁹。

カルデロンとモリエールの距離を測るヴィニーの思考から伺えるのは、「寝取られ亭主」の主題が文学のひとつの伝統を構成しており、時代や作家によってその主題の変奏が読まれ得るということである。実際、『赤と黒』における姦通の主題については、数々の文学的想起に基づいていることが知られているが、その指摘は、本稿で扱う『赤と黒』第1部第21章「主人との対話」における「寝取られ亭主」としてのレナール氏についても当てはまる¹⁰。文学的記憶に支えられながら同時代の刻印を帯びた「男らしさ」の規範を読み解く作業によって、19世紀フランスにおいて規範として機能していた「男らしさ」が、それについて「語られること」とそれを示し得る「行動」の二面において明らかになるだろう¹¹。

⁸ 次の論文では「嫉妬は喜劇的か、悲劇的か」という見出しをもつ節において、本稿で扱う『赤と黒』第1部第21章が、「寝取られ亭主」の喜劇的扱いの——「ゴロワ的精神に満ちた挿話」の——例として、『恋愛論』における「おぞましい情念劇」と対比されている。杉本圭子「嫉妬という病——スタンダール『恋愛論』再読」、『明學佛文論叢』、明治学院大学文学会、40号、2007年、10-11頁。

⁹ Vigny, *Œuvres complètes*, t. II, éd. F. Baldensperger, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1948, p. 1137. なおここに引かれているモリエールの作品は、『スガナレルあるいはコキュにされたと思った男』という表題の1660年に初演された笑劇である。

¹⁰ 次の論文では、『赤と黒』第1部第21章において、先行する文学作品からいかなる借用が行われているのか先行研究を踏まえて論じられている。Pierre Glaudes, « Les passions au miroir des arts dans *Le Rouge et le Noir* », *Nouvelle revue d'esthétique*, 2014/2, n° 14, p. 17-29.

¹¹ 『赤と黒』における「男性性」の主題については次の論文があるが、いずれにおいても「寝取られ亭主」としてのレナール氏への言及はない。Jean-Marie Roulin, « Masculin et pouvoir dans *Le Rouge et le Noir* », dans *Lectures de Stendhal. Le Rouge et le*

小説の「パフォーマンス」

実際に『赤と黒』第21章における「寝取られ亭主」と「男らしさ」の主題の読解を始める前に、本章はいかに小説として語られているのか、いかに「演出」されているのか、つまり「小説のパフォーマンス」¹²として第21章はいかなる特徴を示しているのかをまず確認したい。

まず、本章は明確な構成を示している。本稿で利用する校訂版¹³において14頁ほどから成る本章を、視点の変化をもとに分量もほぼ均等な次の3つの節に仮に分割してみよう。まず第1節として匿名の手紙を受け取ったレナール氏の視点に基づく長大なモノローグから成る頁(177-182)、第2節として庭にでたレナール氏が夫人と遭遇し、夫妻の対話が始まる頁(182-186)。そしてレナール氏が妻の部屋で家具調度品の破壊を行うことを区切りとして、最後の第3節では、夫妻の対話が主に夫人の視点から語られた後、ようやく登場したジュリヤンとレナール夫人の対話が付け加わる頁(186-190)である。

これら三つの節の特徴として、小説と演劇の類縁関係を指摘することができる¹⁴。この点について、スタンダール自身も自覚的であった。1835年に自

Noir, éd. Xavier Bourdenet, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2013, p. 105-120 ; François Vanoosthuyse, « *Le Rouge et le Noir : un cas d'écriture masculine* », *L'Année stendhalienne*, n° 3, 2004, p. 135-159. なお「男性性 (masculin, masculinité)」と「男らしさ (virilité)」は厳密には区別されるべき概念であり、『男らしさの歴史 II』の小倉孝誠による「監訳者解説」によれば、前者が「生物である人間の雄としての属性」を示しているのに対し、後者は「頑強、活力、行動性、勇気」さらには「性的な遅しさと生殖能力」など「社会的、文化的な意味付け」を示すとされる(『男らしさの歴史 II』、前掲書、634頁)。本稿は、性的能力を問われる「寝取られ亭主」の主題を取り扱い、さらに後に見るように暴力という手段による対処を論じるため、「男性性」ではなく「男らしさ」を用いる。また、これらの概念の区別については次の箇所に詳しい。Daniel Maira, Jean-Marie Roulin, « *Constructions littéraires de la masculinité entre Lumières et Romantisme* », dans *Masculinités en révolution, de Rousseau à Balzac*, Saint-Etienne, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 2013, p. 12-19.

¹² 小説を、主人公が示す哲学や作者の思想をそのまま手渡してくれるものとして——ミシェル・クルゼの読解がそうであるように——ではなく、複数の声が実験的に混じりあう複雑な構築物として読解することが、「小説のパフォーマンス」という視点で主張されている。François Vanoosthuyse, « *Le Rouge et le Noir : Un cas d'écriture masculine* », art. cit., p. 145.

¹³ Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, éd. Marie Parmentier, Flammarion, coll. « GF », 2019. 以下、『赤と黒』からの引用は本書を使用し、括弧で囲まれた数字で引用のページ数を示す。第1部21章以外からの引用には、部(I, II)と章番号を付す。

¹⁴ 『赤と黒』において演劇的な要素を指摘することは、次の論文のように法廷の場面を演劇と比較する研究があるなど目新しいことではない。Xavier Bourdenet, « “Ô dix-neuvième siècle !” La scène tragique du *Rouge* », *L'Année stendhalienne*, n° 11, 2012, p. 233-248.

ら『赤と黒』を再読しながら、本章に関連して次のようにメモを付している。「これは喜劇の一場面だ（出来が良いか悪いかはともかく）¹⁵」。そして第21章の本文においても、比喩として「大一番（grande scène）」（188）が読まれる。これは、第一の匿名の手紙で生じた疑惑を払拭するために、夫の思考を操ろうとレナール夫人が巧みに演技をしていることを指している。「この発見に腰を抜かしたふりをし」（187）、「この言葉の言い方は巧みだった」（188）、などからも、夫人が演技をしていることが暗示されている。

一方レナール氏は演技をしているわけではないもの、発言の合間にト書きに相当し得る口調や身振りの指定がたびたび挿入されている。レナール氏の怒りをめぐっては、涙や怒りについての簡潔な描写をのちに検討するが、「なんてことだ！」と自分の頭をたたきながら言った」（178）、「なんだったって！と震える足取りで歩きながら、突然叫んだ」（179）などは、舞台上で上演する際に役立つかのようである。

また、登場する人物が、夫妻とジュリヤンの三者に限定されていることも、舞台との比較を誘う。ジュリヤンが冒頭と終結部のいずれにおいてもわずかに登場するが、この登場は本章の始まりと終わりを画しており、まるで舞台上で場面の転換を暗示するかのようである。時間の経過については、第1節と第2節の間に注記（「日が昇り始めていることに気が付く」（181））がある一方で、場所については、モノローグからなる第1節が屋内で展開した後、第2節の夫妻の対話は庭で行われ、最後に第3節の対話は暴力行為ののち二人が室内に戻るというように、屋内を基調に大きな移動もなく展開している。

これら演劇との接点を示し得る指標をもつとはいえ、第21章において「寝取られ亭主」の悩みが「上演」される仕方は、やはり小説独自のものである。一例として、レナール氏が「妬まれている」という主題を取り上げよう。同じ事柄を述べている記述が、匿名の手紙をめぐる一連の出来事の語りのなかで、離れた個所において繰り返されている。まず、第1節において、レナール氏のモノローグが始まると同時に、語り手がこの主題を提示する。

幸いなことに、彼は自分がひどく妬まれていると思っており、それもゆえなことではなかった。町のりっぱな屋敷は、**の国王がそこに宿泊したことで今後ずっと続くであろう誉を最近授けられたが、この屋敷に加えて、ヴェルジ一の邸宅もかなり立派に整備されていた。（178）

¹⁵ Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. I, éd. Yves Ansel, Philippe Berthier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2005, p. 1035.

「ひどく妬まれていた (il était fort envié)」ではなく「自分がひどく妬まれている」と思っており (il se croyait fort envié)」と書かれていることに注意したい。「幸いなことに」と合わせて、語り手がレナール氏の意識に対して示す皮肉な距離が読み取られる。レナール氏自身が妬みの対象となっていると信じるに足ると考える理由——ヴェリエールとヴェルジーの不動産、加えて国王の宿泊という榮譽——についても、また「壮麗さ (magnificence)」という語が用いられることで過大な印象を与えることについても、妬みの被害者として自らを認識するレナール氏の思考に対する語り手の距離が明確である。

一方、この主題が本章の終盤、第3節において繰り返される際、それを伝えるのは語り手ではなくレナール夫人である。夫人の部屋で家具調度品の破壊を終えたレナール氏に対して、夫人は、周囲が妬んでいることを諄々と説く。

あなたは妬まれていらっしゃるけれども、誰のせいだというの？ あなたの才能のせいですよ。行政の手腕は巧みだし、建物はどれもよい趣味、わたしがもってきた持参金に、なんととっても私の伯母さまがきつと残してくれる莫大な遺産。この遺産の額はやたらと誇張して考えられているけれども、これらのおかげで、あなたはヴェリエールで一番の人物になっているのです。(187)

自分が妬みの対象になっているとレナール氏が考えているという状況だけを取り出すならば、この状況を語り手によってすでに知らされている読者にとって、夫人のこの発言は不要な叙述であろう。けれども、夫人が夫の意志を操るために夫の自画像を利用するにあたり、その自画像を読者がすでに知っているということは、夫人が夫を手玉に取るさまの真实性を高めることに役立つ。第1節での記述は、レナール氏の状況を解説しつつも、レナール氏の思考に対して語り手が距離をとることでレナール氏の過度の思い込みがあることを暗示したが、夫人の発言を通した第3節においてもレナール氏の思考がそのままに提示されるわけではない。レナール氏の思考は、夫人の発言に続く「生まれを忘れていたよ、とレナール氏は微かに笑みを浮かべて言った」という記述から推測するほかないのだが、この発言は、自身が妬まれているという主題をめぐる夫人に巧みに操られてしまっていることを暴露するばかりである。

以上のように、本稿で取り扱う『赤と黒』第1部第21章は、演劇との類縁性を示すとともに、いくつかの節による明確な区分とそれにとまなう視点の

交替を示している。同一の主題が異なった形で繰り返し扱われる際には、どの視点からいかに語られるのかという点も問題になるであろう。以下の分析において、モノログであることや語り手が直接介入することが指摘されるが、それらもまた本章の語りの多様性を示すものである。

真実から世論へ

『赤と黒』第1部第19章の終結部において、レナール夫人とジュリヤンの関係を告発する匿名の手紙をレナール氏が受け取ったことが語られる。続く第20章では、ジュリヤンがこの匿名の手紙の存在を嗅ぎ取ったことを受け、レナール夫人は対応策として自分自身に宛てられたもう一通の匿名の手紙を創作することを提案する。ジュリヤンを一時的に家から遠ざける口実を自ら作りだすと同時に、匿名の手紙の差出人がヴァルノであることを夫に確信させようというのだ。

以上の状況を受けた第21章「主人との対話」では、主に夫妻それぞれの視点から、第一の匿名の手紙が惹き起こした顛末が語られる。「寝取られ亭主」たるレナール氏の「男らしさ」は、「寝取られ亭主」という形象がいかに語られるのかという言葉の問題として表れるだろう。

真実の探求

レナール夫人とジュリヤンの共作による第二の匿名の手紙の全文が提示されているのに対し（176, I-20）、第一の匿名の手紙についてはその内容が具体的に示されることはない。とはいえ、「彼の家において何が起きているのか、微に入り細にわたり教えてくれる」（171, I-19）という記述から、第一の匿名の手紙の内容を想像することができる。夫人によればレナール氏が夫人についての匿名の手紙を受け取るのはこれが初めてではないが¹⁶、このような状況におかれた夫の当然の反応として、告発の内容が事実であるのか否か、そして、そもそも誰が告発したのか、匿名の手紙にまつわる真実の探求が図られる。

まずは、証拠物である匿名の手紙自体の検討から始められる。

¹⁶ 「これは、夫が初めて受け取ったものではありません、それも私についてならなおさらです。」（174, I-20）

手紙をあらゆる角度から検討した。これは女の筆跡ではないのか？、と思った。その場合、どの女が書いたのだろうか？ ヴェリエールで知っている女性全員を思い返したが、疑いの的を定めることはできなかった。男がこの手紙を口述したのだろうか？ その男は誰だろうか？ ここでも不確かさは変わらない。
(177-178)

このように開始された真実の探求であるが、レナール氏においては、この努力が重ねられるわけではない。

ある時は自分自身に対する、また別のときは自分の周囲のすべてに対するこうした怒りの発作にかられながら、恐ろしい一晚をすごした。けれども、幸せなことに、妻を見張るという考えは持たなかった。(179)

見張ること、そしてあわよくば姦通の現場を押さえるということは、真実探求のための第一歩ではなかろうか。もちろん、レナール氏もそんなことは百も承知である。さまざまな思念に襲われながらも、真実追及の手段を考える瞬間がレナール氏に訪れる。

寡になるという考えによっていつとき幸福を感じた後に、レナール氏の想像力は、真実を確かめるための手段に立ち戻った。みなが寝静まった後に、ジュリヤンの部屋の扉の前に、麩をうつつらと撒いておこうか？ 翌朝、明るくなれば、足跡が見えるだろう。(181-182)

妻の姦通という疑惑を確かめるためには、いささか突飛な手段に見えるものの、「麩(son)」のエピソードはトリスタン伝説における「小麦粉」に由来することが知られている¹⁷。とはいえ、この手段の文学的背景が語りにお

¹⁷ ベディエ版の翻訳では「パン屑」と訳されている(ベディエ編『トリスタン・イブ一物語』佐藤輝夫訳、岩波文庫、1985年、99-102頁)「小麦粉(fleur de farine)」は、バルール『トリスタン物語』では、「flor」(676行等)、「farine」(708行)で示される。バルールでの顛末は次の通り。「ふたつの寝台の間に小麦粉を撒き、/夜の間に恋人の一方が相手のもとに忍べば、/足跡のはっきり現れるように仕組む。/小麦粉が足跡をとどめるからだ。」(『フランス中世文学集1 信仰と愛と』、白水社、1990年、168頁(バルール「トリスタン物語」、新倉俊一訳)) この小麦粉の罠に気が付いたトリスタンは、寝台から寝台へ跳躍するものの、前日に足に負った傷から出血するために事態は露見する。「床の小麦粉に血が、まだ温かい血がはっきり、/王はまた寝台にも血の痕を見つけた。/白の敷布は紅に染まり、床の小麦粉には/跳んだはずみに散った血の痕が点々と。」(同書、170頁)

いて明示されるわけではない¹⁸。反対に、同時代のもう一つの逸話と並べられることで、その文学的由来は隠されているかのようだ。

カジノで語られたもう一つの話によると、わずかな蠟を用いて髪の毛を接着させ、封印を施すかのように妻の扉と色男の扉を閉ざすことで、とある夫は自分の災難を確信したという。(182)

「麩」にせよ「蠟」と「髪の毛」にせよ、これらの手段は、物語においては「カジノ」で語られたという伝聞によってしか説明されない¹⁹。一つ目の「麩」の手段は、小間使いのエリザに気づかれることで自分の嫉妬が露見することを恐れるレナール氏によって却下される。一方、「蠟」と「髪の毛」の手段の方が好ましいとみなされるものの、こちらも実行に至ることはない。

結局のところ、真実の探求はさほど重視されることはない。それどころか、レナール氏は、中傷という一般論を持ち出すことで、妻の無実を自ら信じ込もうとする。

妻が無実であるという考えを楽しんだ。この見方をすれば、性格の強さを見せる必要から免れられ、実に好都合なのだった。どれほどたくさんの女たちが、中傷されてきたことか！(179)

「性格の強さ (du caractère)」を示すなんらかの行動 —— これについては次節で検討する —— を避けることが優先されるように、真実の追及を棚上げにするには相当の理由がある。疑惑の解明よりも重要なのは、現在の生活の継続である。「いいや、と叫んだ。妻と別れることはしまい。あまりに便利だから。家に妻がいないとどうなるかを想像しては、ぞっとした。」(181)

¹⁸ この場面における中世の物語の暗黙の引用は、先行するさまざまな作品から自在に引用する「本歌取り」を特徴とする『赤と黒』においてスタンダールが見せた「遊び」とみなすことができる(松原雅典『『赤と黒』の解剖学』、朝日選書、1992年、47頁)。

¹⁹ 同じくスタンダールによる16世紀イタリアを舞台とする『カストロの尼』(1839年)には、恋人のジュールが父に襲撃されるのではという恐れエレーヌが砂を用いるエピソードがある。「すぐさま彼女は、父が寝台の傍らに吊っていた5丁の立派な火縄銃の木製の柄に、少しばかり砂埃をかけに行った。短刀と長剣も、砂埃でうっすらと覆った。」(Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. III, éd. Yves Ansel, Philippe Berthier, Xavier Bourdenet et Serge Linlès, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2014, p. 63.) その晩、エレーヌは銃が装てんされており短剣も長剣も触れたあとがあることに気が付き、父親の殺意を確信する。疑惑の内容は異なるものの、疑惑の解明のために用いられる手段の「ロマネスク」な発想はレナール氏の場合と共通である。

家庭生活の維持だけではなく、レナール氏自身にとっても、妻の存在は不可欠になっている。あまりに夫人に「慣れ切っている」（179）レナール氏は、この姦通の疑惑に際しても、本来は警戒すべき相手であることを忘れて、「妻に相談しなくては」（178）という発想をいつきではあれ持つてしまうほどである。

このように、姦通の疑惑を前に、レナール氏は真実の探求をいったんは目指すものの、それは実現しないあくまで空想上のものにとどまっている。次の文句は、このようなレナール氏の思考の核心といえよう。「疑いのままにしておいて、何も確かめられないほうがよいのではないか？」（181）自分に都合のよい想定にふけるままでいられたならば、「寝取られ亭主」の悩みはさほど深くはならなかったかもしれない。というのも、姦通において問題になるのは、夫婦、さらには間男も含めた三名の当事者だけではないからだ。自分の周囲で姦通がいかに語られるのかという問題が、レナール氏の苦悩をより深くするだろう。

《On》の世界

先ほど確認した通り、姦通の疑いを検証する手段が「カジノ」で取りざたされていたように、姦通は当事者を取り囲む「他者」の口にもぼる。この「他者」は、「ファルコーズ」と「デュクロ」（179）という固有名で呼ばれるわずかな例外を除くと、名を持たない集合として示される。

なんだって！ と震える足取りで歩きながら、突然叫んだ。あいつが愛人といっしょにおれを馬鹿にするのを、我慢するというのか、それでは、まるでそのへんの奴らや浮浪者かのようなではないか！ おれがお人よしだということを、ヴェリエール中が、あざ笑うことになるのか？ シャルミエについて、なんと言われているいなかったか？（これは、この地方の誰もが知る裏切られた夫である。）やつの名前を耳にすると、どの顔にも微笑が浮かばないか？ 優秀な弁護士なのだが、弁がたつことなどいったい誰が話題にしようか？ ああ、シャルミエか！ と言われている。ベルナールのシャルミエか。やつの恥辱の原因となった男の名で、こんな風に呼ばれているのだ。（179-180）

「ヴェリエール中」以下の文章では、人称代名詞の《on》が主語として繰り返し用いられている。具体的な名を欠きながらも、姦通を話題にするとある集合が存在することを示している。《on》に比べると少々具体性をました「ヴェリエール中」は、この「小さい町」（39, I-1）においてレナール家のスキャンダルを話題にする集団があることを示している。「ヴェリエールは

そのことを知るだろう」（181）と繰り返されるように、レナール氏はヴェリエールで噂になることへの恐怖に取り憑かれている。

そうなると、どれほどおれは馬鹿にされるだろう！ 妻は子どもたちを愛しているから、すべては結局彼らのものになるだろう。だがおれは、ヴェリエールの笑いものになってしまう！ なんだって、とあいつらは言うだろう、やつは妻に仕返することすらできなかったんだ、と！（181）

この引用には姦通を話題にする主体として三種類の語が用いられている。「馬鹿にする」の主体は「on」であり、「笑いものにする」の主体は「ヴェリエール」であり、意気地なしの「寝取られ亭主」について噂する「あいつら」は「ils」である。いずれも同一の集団を想定していると想像されるが、これらは一体どのような人物たちを指すのだろうか。

この点において具体性がさらにますのは、「友人たち」が言及される場合である。

この瞬間において、彼は、大騒ぎはしまいとほとんど決意した。大騒ぎをする
とヴェリエールの善良な友人たちを大いに喜ばせることになるだろう、という
考えからだった。（181）。

ここでも集合的に把握されながら、スキャンダルを喜んで噂するのが友人たちであるという逆説が示される²⁰。この逆説は、「彼は、知り合いのほとんどから妬まれ、おそらくは憎まれてもいた」（178）という記述からも窺い知れる。では、矛盾に満ちたこの「ヴェリエールの善良な友人たち」とは誰なのか。姦通の疑いを確認する手段をレナール氏に教えたという上述の「カジノ」が鍵になる。

一瞬あとに、虚栄心の傷が再びうずいて、レナール氏は、ヴェリエールのカジノすなわち貴族のセルクルのビリヤード場で話題にあがった手段のすべてを、
どうにか思い出していた。口の回るやつが賭けを中断しては、裏切られた夫を

²⁰ この「小さな町」において知人こそが敵であるという状況は、レナール氏の貴族の家柄と町長という地位や、選挙や猟官をめぐる政治状況、産業や不動産取引などに見られる経済状況、さらには、『赤と黒』に通底する「人間は人間に対して狼である」というホブズ的な闘争の社会観——たとえば第2部第44章で死刑を待つジュリヤンが独り言つ「自然法などない」「自然にあるのはライオンの力だけだ」（595, II-44）——などから説明され得るだろう。

笑いものにして楽しむのだった。こうした冗談が、この瞬間、どれほど残酷に思えたことか！（181）

「カジノ」は、賭けだけでなく会話を楽しむ場であり、原文においてイタリックで強調されているように、上流階級のための場所である²¹。すでに見たように、この空間は姦通の疑惑に対する対処法が話題にされる場であったが、それは「寝取られ亭主」を笑いものにする場でもあったのだ。もっとも、ヴェリエールの「貴族のセルクル」たる「カジノ」の実態について、『赤と黒』におけるわずかな言及から正確に推測するのは困難である²²。それでも、第1部第23章でのレナール氏の発言からは、「カジノ」の役割がうかがい知れる。

これをカジノに持って行って、破廉恥なヴァルノが書いたものだと皆に見せてやりたい。貧乏だったのに、おれのおかげで、ヴェリエールで指折りの金持ちになれたというのに。皆の前で、このことを分かせてやる。そのあと、やつと決闘しよう。これはひどすぎる。（214, I-23）

決闘が想定されていることから、レナール氏は当然のようにヴァルノを自身と対等な立場にあるとみなしている²³。ところが、その人物の生まれと経

²¹ スタンダールの描く地方都市において、本来であれば社会の公共性を示すはずの空間が社会の分断を示すことが指摘されている（Philippe Berthier, *Espaces stendhaliens*, PUF, coll. « Ecrivains », 1997, p. 259-260）。『リュシアン・ルーヴェン』（1835-36年）において、街路は、挨拶を交わすのではなく野次を飛ばし合う場であり、カフェは、政治的な志向ごとに区分されているのと同様、ヴェリエールの「カジノ」は、上級階級を集めるのである。

²² アラン・レイによるロベールの『フランス語歴史辞典』によると、「売春宿」や「賭博場」を指していた「カジノ」は、19世紀から温泉や海岸の保養地における豪華な施設を指すようになった。一方、「セルクル (cercle)」が指す対象は多様であり、参加者が円陣を成して会話を楽しむというアンシャン・レジーム期以来のサロン文化の一要素である一方（アンヌ・マルタン＝フュジェ『優雅な生活 〈トゥ＝パリ〉、パリ社交集団の成立 1815-1848』、前田祝一監訳、新評論、2001年〔1990〕、210-213頁）、王政復古期の文脈では、ブルボン王家による宮廷の大規模な夜会の呼称であり（同書、66-67頁）、また、社交界の男子たちの参加する「カフェ」とならぶ社交の場の一形態である「クラブ」を指すこともある（同書、410頁）。「寝取られ亭主」を笑いものにする場として言及されるヴェリエールの「貴族のセルクル」は、三つ目の対象を意味しているように思われる。この「クラブ」としての「セルクル」についての近年の研究として、次の論文を参照した。長野壮一「19世紀前半パリにおけるセルクル——M.アギュロンによる「ブルジョワ的社交関係」概念の再検討——」、『クリオ』、東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室「クリオの会」、第27巻、2013年、51-64頁。

²³ 決闘は自分と同等のものと行うものであるという主題は、『赤と黒』第2部に読ま

歴を同質的な上層集団を前におおっぴらに知らしめることで、本来はそこに属するはずはなかったと侮辱し、ヴァルノの横恋慕に対する復讐にしようというのだ。

この「カジノ」は、『赤と黒』においても一度言及される。第1部の最終章である第30章において、パリに旅発つ直前、レナール邸に忍び込んだジュリヤンと夫人が逢瀬を重ねるなか、この逢引きに一切気が付かないレナール氏の出かける先がカジノである。氏はそこでビリヤードに勝ち、帰宅早々、19フランを獲得したという話をする。物語上の興味として重要なのは、レナール氏がこの駄弁を弄するのが、ジュリヤンが先ほどまで座っていた椅子に腰かけながらであると同時に、ジュリヤンが今ではその下に隠れているソファの真向いに身を置いているという点である(286-287, I-30)。「寝取られ亭主」の愚鈍さを示す喜劇的なエピソードであるが²⁴、「寝取られ亭主」が笑いものにされる場に出かけることで、留守宅において実際に姦通が進行するという点に、二重の皮肉を読み取れよう。

言論の空間

姦通の疑いが噂にのぼることを恐れるレナール氏の想像において、姦通を話題としてもてあそぶ人たちとして挙げられるのは、「on」で指し示されたヴェリエールの人びとであり、レナール氏の「善良な友人たち」であり、「貴族のセルクル」の構成員である。しかし、この話題の流通は、ヴェリエールという地方の小都市に限定されるわけではない。

このことを示すのが、固有名が明かされるわずかな例としてすでに言及した二人の人物のうちのひとり、ファルコーズである(179)。幼少期からの友人だったものの、生まれが貴族ではないという理由で、王政復古をきっかけにレナール氏が絶縁したというエピソードからは、体制の転換により階級意識が再編成される過程が読み取られる。ファルコーズが職業として言論に関わっていることは、偶然ではないだろう。紙の商人であるファルコーズは、印刷業者を買収し新聞の発行に乗り出す。発行禁止の憂き目にあうと、町長

れる。ボーヴォワジ従男爵はジュリヤンと決闘したことの滑稽さに気づいて愕然とし(「ラ・モール氏のたんなる秘書と決闘したことを認めるなんて、そんなことできやしない。」(342, II-6))、ジュリヤンが侯爵の親友の私生児であると言いふらす。

²⁴ この場面が、ボーマルシェによる戯曲ならびにダ・ボンテ＝モーツァルトによるオペラ『フィガロの結婚』に基づいていることが知られている。松原雅典、『『赤と黒』の解剖学』、前掲書、36頁；Matsubara Masanori, « Les Noces de Figaro et Le Rouge et le Noir », *L'Année stendhalienne*, n° 1, 2002, p. 52-54.

をつとめるレナール氏に助けを求めるが、町長は旧友の請願をにべもなく拒絶した。王政復古期における言論の自由をめぐる議論を思い返すならば²⁵、このエピソードに、『赤と黒』の副題に読まれる「年代記 (chronique)」としての側面を読み取ることができる。

ファルコーズが生業として関わる言論の空間を原因として、姦通の疑いをめぐるレナール氏の煩悶はさらに深いものとなる。

けれど、ヴェリエールで、いや県全体ですら、どんなに噂になることだろう！ ファルコーズの新聞が発行停止になったあと、編集長が牢屋から出てきたとき、おれは、やつから 600 フランの地位を奪うことに協力した。この記者風情は、懲りずにブザンソンにまたもや姿をみせていると聞いたけれども、巧みにおれをこけにするだろうし、それもやつを法廷に連れ出すことができないような仕方なのだ。(180)

出版と言論の自由がもたらすのは、公人とはいえ個人の家庭生活をめぐる報道であり、巧みささえあれば法によってそれを抑制することはできない。こうして、レナール氏の想像が掻き立てる恐怖において、姦通を報じる言論の空間はヴェリエールからブザンソンを県都とする県全体へと広がるが、この空間はさらにいっそう拡大する。

パリのあの恐ろしい新聞に、おれは載ることになるだろう。なんてことだ！ なんとたる恥辱！ レナールという由緒のある名前が、笑いものにされて泥に浸かるなんて……もしも旅行しようものなら、名前を変えなくてはならないのか。なんだって！ おれの名声と力の源であるこの名前を捨てるなんて。なんと惨めなことか！ (180)

ここで、レナール氏の過剰なまでに恐怖の理由が明らかになる。「寝取られ亭主」が感じる恐怖とは、「男」が引き継いできた家系にもとづく「名」が、言論のひらく公共空間において傷つけられることなのである。

²⁵ 「すべてのフランス人は自らの信条を出版し印刷させる権利を有するが、この自由の濫用を抑制すべき法に従ってのことである」。第 8 条においてこのように定める 1814 年の憲章に基づき、王政復古期の政府は言論の自由の原則とそれを制限する政策のあいだで揺れることになる (Francis Démier, *La France de la Restauration (1814-1830). L'impossible retour du passé*, Gallimard, coll. « Folio histoire », 2012, p. 261 etc.)。王政復古と 7 月王政の 33 年間に於いて出版に関する法とオルドナンスが 18 件制定されていることは、出版の自由の問題が政治課題の中心にあったことを示している (Pierre Albert, Fernand Terrou, *Histoire de la presse*, PUF, 1970, coll. « Que sais-je ? », p. 39)。

言論の空間における「名」の棄損は、第21章においてはあくまで想像にとどまっている。第23章において「ヴェリエールの上流階級は、彼らが強い非難をしても、レナール氏がさっぱり動じないことに憤慨し始めた」(212, I-23)と読まれるように、姦通の噂はヴェリエールの町の人びとのあいだで口の端にのぼることこそあれ、新聞に載る事態には至ってはいない。レナール氏の不安は半ばしか的中しなかったといえる。レナール氏の「名」が新聞紙上で実際に傷つけられる可能性があるのは、第2部の大詰めにおいて、ジュリヤンがレナール夫人に発砲し裁判が開かれた際である。陪審員の名を伝える新聞への言及から、事件がひろく報道されていることが分かるものの(569, II-40)、この段階においては、レナール氏の煩悶は物語の後景に押しやられており「名」へのこだわりを読み取ることはできない。

レナール氏において特徴的なのは、姦通の嫌疑自体よりも、それが語られることの恐怖である。一部の人による「世論」が支配する時代という主張は『赤と黒』において繰り返されるが²⁶、この指摘は姦通の嫌疑においても当てはまる。レナール夫人は、第二の匿名の手紙を準備しながら彼女の予測する事態の推移をジュリヤンに語りつつ、「世論」の影響の強さを指摘する。「あなたについて、あの人は世論が指示する通りに振る舞うでしょう、このことを一瞬たりとも疑わないで」(175, I-20)。反対に、レナール夫人もまたその女性という属性ゆえに、強く世論の支配を受けることを語り手は強調する。「田舎において、夫は世論を左右するのである」(188)。先ほどは、世論に従うとされたレナール氏は、今後は妻の評判をめぐる世論に影響を与える立場にある。その影響は、妻の社会的な死をももたらすほどとされる。「19世紀において夫が妻を殺すのは、公衆による軽蔑で刺すことによって、つまり、どのサロンの扉も閉ざすことによってである」(189)。恐怖と噂による支配の結果、世論はこうして「殺す」という極端にまで至り得る²⁷。不

²⁶ 第1部第1章末尾における「世論による専制」(43, I-1)への言及や「これらの人びとが世論を作るのであり、そもそも、憲章をもった国において世論は恐ろしい」(204, I-23)といった言及に見られるように、民主体制を支える「世論」が特定の人たちに左右されることにより、抑圧として機能することが強調されている。このことは、第2部第1章冒頭で語られる田園での理想的な暮らしが今日において不可能であるというエピソードからも窺い知ることができる。このエピソードについては、次の論稿がある。Xavier Bourdenet, « Si vos personnages ne parlent pas politique, ce ne sont plus des français de 1830 » « Les plaisirs de la campagne » (*Le Rouge et le Noir*, II, I) », dans *Relire Le Rouge et le Noir*, dir. Xavier Bourdenet, Pierre Glaudes et François Vanoosthuyse, Classiques Garnier, 2013, p. 49-67.

²⁷ 『赤と黒』において「世論」が恐怖と噂によって支配するが、『パルムの僧院』で描かれる専制国家においては、おなじく恐怖と噂による支配が監獄を通して現実化

実な妻にもたらされる死は、ここでは比喻にとどまっているが、より具体的な意味において「寝取られ亭主」の脳裏をよぎることになるだろう。

殺すべきか、それとも……

ここまで、姦通の疑いをめぐるレナール氏の煩悶を、主にレナール氏のモノローグを対象に検討してきた。そこで問題となるのは、姦通が誰によって、いかに語られるかであった。「寝取られ亭主」の悩みは、こうした語りの次元にとどまるわけではない。ここまでの議論においてすでに言及された「仕返し」（181）や「性格の強さ」（179）などが想定するのは、具体的な行動でありそれ自体が「男らしさ」を示すものである。姦通の疑いを抱いた「寝取られ亭主」は、どのような「男らしい」行動によってこの不名誉な事態を解決しようとするのだろうか。

殺すべきか

姦通の疑いゆえに妻を殺害すること。一見極端なこの解決策がレナール氏の胸に浮かぶさまは、まるでそれが自明の策かのように自然である。

幸いなことに、とまた別のときにレナール氏は言った。おれには娘がいない。おれがこれから母親を罰するやり方でも、子どもたちの将来を傷つけることにはなるまい。あの百姓を妻と一緒に取り押さえて、ふたりとも殺してしまうこともできる。こうなると、事件が悲劇的だから、もしかすると滑稽さはなくなるだろう。この考えは気にいったので、あらゆる点から検討した。刑法はおれの味方だ。それに、なにが起きようとも、コングレガションと陪審員の友人たちがおれを救ってくれるだろう。狩猟用の刀を点検すると実に切れ味がよさそうだった。けれども、血のことを思うと怖くなった。（180）

姦通の疑いゆえに夫が妻と間男を殺害するという主題は、決して突飛なものではない。たとえば、ダンテ『神曲』『地獄篇』第5歌のパオロとフランチェスカのエピソードを挙げることができる。地獄での旅を開始したばかりのダンテとウェルギリウスは地獄の第二の圏で、二人の人物が一つになって飛ぶ姿を目にする。アーサー王伝説の物語を読みながら結ばれたフランチェスカとパオロが、パオロの実兄でもあるフランチェスカの夫によって殺され

しているといえる。Yves Ansel, «Peur et rumeurs», dans *Pour un autre Stendhal*, Classiques Garnier, 2012, p. 249-267.

た顛末が明かされる²⁸。このエピソードはスタンダールと同時代に、美術や舞台で扱われており、スタンダール自身もしばしば言及している²⁹。間男たるジュリヤンの殺害は、『赤と黒』の他の箇所においても想定されており、レナール夫人は中世の逸話を思い出しながら、夫が狩の最中に事故を装ってジュリヤンを殺し、その心臓を自分に食べさせるのではないかと心配する(182)³⁰。姦通を疑われる妻の殺害については、『恋愛論』(1822年)を紐解くと、姦通の疑いを理由として妻の殺害に至るシェイクスピアの『オセロー』が繰り返し言及されるほか³¹、デスデモーナと同じ運命をたどる人物としてダンテ『神曲』『煉獄篇』第5歌におけるマレンマのピアが語られる。ダンテの詩句が引用された後に、嫉妬に駆られた夫が、瘴気で知られる沼地に位置する塔に妻とともに閉じこもり、妻が死ぬのを待ったとも短刀で殺したとも伝えられていると語られる³²。『恋愛論』に限ることなくスタンダールの著作を見渡すならば、スタンダールが、文学や舞台、絵画における表象に留まることなく、姦通を理由に夫が妻を殺害した事例を、過去のイタリアを特徴づける風習としてさまざまな機会に繰り返し参照していたことがわかる³³。

²⁸ ダンテ『神曲 地獄篇』、原基晶訳、講談社学術文庫、2014年、90-97頁。

²⁹ アングルによる絵画「パオロとフランチェスカ」(1819年、アンジェ)が知られているこのエピソードについて、スタンダールは、『恋愛論』の第1巻第8章と第14章において引用しているほか(Stendhal, *De l'amour*, éd. Xavier Bourdenet, Flammarion, coll. « GF », 2014, p. 78, 86)、知人ペリコによる戯曲『フランチェスカ・ダ・リミニ』(1815年)に旅行記で繰り返し言及している。たとえば、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ(1826)』では、「『フランチェスカ・ダ・リミニ』において、愛は神々しく描かれている。」とある。(Stendhal, *Voyages en Italie*, éd. Victor Del Litto, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 327.)

³⁰ 間男の心臓を妻に食べさせる、という主題は13世紀の韻文小説『シャトレヌ・ド・ヴェルジー』に由来している。『赤と黒』においてはレナール家の別邸が位置する村ヴェルジーをこの物語の舞台と同一視することで(95, I-8)、ジュリヤンの心臓をめぐるレナール夫人の空想に根拠を与えている。『恋愛論』第2巻第52章「12世紀のプロヴァンス」においても同様のエピソードが読まれる(Stendhal, *De l'amour*, op. cit., p. 215-216)。心臓のエピソードをめぐるのは、次の論稿を参照。Marielle Di Maio, « Roman et Moyen-Âge. Le cœur à Vergy », dans *Relire Le Rouge et le Noir*, op. cit., p. 181-194 ; id., *Le Cœur mangé. Histoire d'un thème littéraire du Moyen-Âge au XIX^e siècle*, PUPS, 2005.

³¹ Stendhal, *De l'amour*, op. cit., p. 147. オセローを始め『恋愛論』における嫉妬する夫と犠牲となる妻については、次の箇所を参照。杉本圭子「嫉妬という病——スタンダール『恋愛論』再読」、前掲論文、13-18頁。

³² Stendhal, *De l'amour*, op. cit., p. 120-121. ダンテ『神曲 煉獄篇』、原基晶訳、講談社学術文庫、2014年、86頁。

³³ この点については、拙稿を参照。「『パルムの僧院』における名誉の掟 「地方色」

『赤と黒』に戻るならば、レナール氏による刑法への言及が実態に即していることが知られている。1810 年刑法典における第 324 条には次のような規定が読まれる。「 […] 姦通の場合においては、夫婦の住居において、姦通の現行犯を襲ったそのときに、夫が妻およびその共犯に対して犯した故殺は、宥恕される。」³⁴ 姦通を不処罰とする法律によって 1975 年 7 月 11 日（施行は翌年 1 月 1 日）に廃止されるまで効力を持ち続けたこの項目こそが、レナール氏の念頭にあるのは間違いないだろう。さらに、上記モノローグに読まれる、「コングレガションと陪審員の友人たち」を通して法廷の裁決に及ぼし得る影響力についても、決してレナール氏の過大評価ではないことがこの小説の読者には分かることになる。第 2 部終結部でのジュリヤンの裁判において、コングレガションのフリレール師が評決に与える影響が繰り返し語られるように³⁵ —— 実際の死刑判決には、陪審員長を務めるヴァルノの影響が決定的とされるのだが³⁶ ——、裁判の評決を法廷の外部から操ることは不可能だとはみなされていないからだ。

このように、法律上の免責と万一の場合の裁判での見通しを踏まえれば、殺害は十分に検討に値する。けれども、レナール氏はこの解決策を採るには至らない。凶器を実際に手にすると怯えてしまうレナール氏の姿からは、ダンテやシェイクスピアの舞台となった過去のイタリアと比較した際の習俗の違いが浮かび上がる。レナール氏は殺害が周囲に与え得る印象を「悲劇的」と「滑稽」の両面において理解しておきながら、自分自身が怖気づくことで自ら滑稽を示してしまう。殺害をあくまで想定上のものにとどめ、決然とした行動に踏み込むことがない、この逡巡とそれがもたらす滑稽こそ 19 世紀フランスの「寝取られ亭主」の姿である³⁷。

をめぐって」、『仏語仏文学研究』、第 53 号、東京大学仏語仏文学研究会、2020 年、79-81 頁。

³⁴ 中村義孝『ナポレオン刑事法典資料集成』、法律文化社、2006 年、271 頁。次の箇所も参照。工藤庸子『近代ヨーロッパ宗教文化論 姦通小説・ナポレオン・政教分離』、東京大学出版会、2013 年、276-277 頁。

³⁵ 「まず、この八名の陪審員については請け合います、と彼 [フリレール師] はマチルドに言った。最初の五名は機械のようなものですし、ヴァルノは私の手下、モワロは私にすべてを負っているし、ド・ショランは何にでも怖がる愚か者ですから。」（569, II-40）；「 […] 私の将来のために尽くしてくれる六名がいますし、私が司教になれるかどうかは彼ら次第だと分かせておきました。」（573, II-41）

³⁶ 「 […] 評決の日、ヴァルノ氏は県知事に任命されることが分かっていたので、あえてフリレール師をこけにして、ジュリヤンを死刑にする喜びを味わったというのだ。」（591, II-44）

³⁷ 血の恐れから復讐を断念するレナール氏は「復讐と血に飢えた夫の類型」の対極に

追い出すべきか

もちろん、「寝取られ亭主」の解決策はほかにもあり、より暴力性の緩和された手段が講じられる。姦通のつくる三角形の別の頂点の一つを、つまり妻あるいは間男を姦通の現場たる家から排除するのである。

あの生意気な家庭教師をめった打ちにして、追い出すこともできる。だが、ヴェリエールそして県全体ですら、どれほど噂になることか！（180）

妻を殺さずに、恥辱に満ちて追い出したとしても、ブザンソンのあいつの叔母が財産をそっくり手渡してしまうだろう。あいつはジュリヤンと一緒にパリで暮らす。ヴェリエールにこのことは伝わるだろうから、おれはまたもお馬鹿さんだということになってしまう。（180）

ジュリヤンを「めった打ち（rouer de coups）」にするにせよ³⁸、夫人を「追い出す（chasser）」にせよ、これらを選択しないのは、ヴェリエールの人々がそれについて語ることが想定されるからである。

こうして、暴力は噂とスキャンダルの予見によって抑制されるが³⁹、加えて、金銭という実利も「寝取られ亭主」の判断に影響を与えていることを無視するわけにはいかない。レナール氏がここで夫人の叔母の財産について言及していることは、婚姻関係における財産の重要性を思い起こせば当然といえる。1816年に廃止されて以来1884年に復活するまで、離婚は制度上存在しなかったため、レナール氏の選択肢には当然入らない。レナール氏は次のような見通しをたてる。仮に今回の嫌疑を不問に付し、夫人としばらく一緒に暮らしたとしても、何らかの不和が生じ仲たがいするだろう。きっと、夫人が叔母の財産を相続する前に起きるだろう。その遺産は結局子供たちのも

あり、「現代の夫は、緩和をもたらす文明の影響により、かつてのエネルギーを失い、殺害をもたらす「目には目の法」の見通しを前に後ずさる。騎士道恋愛物語は、風俗喜劇に変貌する。」（Pierre Glaudes, « Les passions au miroir des arts dans *Le Rouge et le Noir* », art. cit., p. 23.）

³⁸ 間男たるジュリヤンは「めった打ち」の対象であるが、夫人に横恋慕するヴァルノは——「カジノ」に関する議論においてすでに見たように——決闘の対象である（214, I-23）。レナール氏が想像する対応において、ジュリヤンとヴァルノの間の階級差が明確に意識されている。

³⁹ 妻あるいは間男のどちらかが家から出ていくという解決策は、モノローグに続く夫妻の対話においても検討されるものの、やはり同じ理由によりその場では採用されない。「「[...] 破廉恥なこの手紙を読んだとき、私は心に決めたのです。彼か私かが、あなたの家から出ていくのだと。」「騒ぎを起こして、おれもお前も名誉を失ってしまいたいというのか？ ヴェリエールのたくさんの連中が馬鹿にすることになる。」「」（184）

のになるにせよ、自分は馬鹿を見ることになる(181)。姦通の疑いがありながらもひとまず夫人と良好な関係を保つ必要が、夫人の叔母の遺産相続と関連付けられて考察されている⁴⁰。

もっとも、金銭をめぐるレナール氏の判断については、夫人は少々異なる想定をしていた。第二の匿名の手紙を準備しながら、夫人は次のようなケースを想定する。「もしもこれがうまくいかなければ、私はすべてを奪われるでしょう。」(177) この見通しのもと、夫人はジュリヤンに頼んで、金貨とダイヤモンドの入った箱を予め山に埋めておいた。けれども実際には、レナール氏は「すべてを奪う」ような断固とした行動をとることはない。蓄えを密かに隠しておくという夫人の慎重な振舞いは、夫人の空想的な傾向の現れともいえるし、夫がとり得る決断と行動について買いかぶっていたともいえる。

その理由は評判であれ将来の遺産相続の見通しであれ、殺害よりも暴力性の緩和された追い出すという選択を採らないレナール氏にとって、残された方策がさほどあるわけではない。八方塞がりの状況におかれ、苦し紛れの言葉が発せられる。「なぜあいつは死んでいないんだ！ そうすれば、おれが笑いものになることはないのに。なぜおれは寡になっていないんだ！」(181) 自分が行動を起こさなくても、殺害の結果だけが実現すればどれほどよいことか。追い詰められた末の発言は、滑稽でありながらも真率である。ここでもまた、「笑いものになる」ことを避ける願望を吐露する「寝取られ亭主」の姿自体に、滑稽を見出すことができる。

暴力と権力

以上のように、殺害という極端なかたちであれ、緩和されたかたちであれ、暴力を伴う解決策は検討されるもののいずれも実行されることはない。とこ

⁴⁰ 1804年のナポレオン民法が強力な父権と女性の無能力を規定したことはよく知られているが(工藤庸子『近代ヨーロッパ宗教文化論』、前掲書、第2部第四章「民法と家族制度」、205頁以下参照)、結婚にあたり夫婦の財産は共同で管理され、その管理は夫が行うものとされた。この原則は婚姻中に行われた相続についても同様である。妻が不動産を相続した場合、妻の固有財産とみなされるものの、妻に帰属するという所有権は、収益権(これは共同財産に分類される)のない観念的な所有名義にとどまっていた(稲本洋之助「フランスにおける夫婦財産制改正の歴史的意義」、『比較家族史研究』、第6号、比較家族史学会、1991年、122頁；同『フランスの家族法』、東京大学出版会、1985年、163-165頁)。レナール夫人が叔母から相続する見通しの財産——その管理をめぐるレナール氏が不安に感じているようである——は、名義上は夫人個人の所有とはなるものの、その管理は依然として夫が担うということを法律は規定しているようだ。

ろが、こうした検討を経ることなく、レナール氏は実際の暴力行為に及ぶことになる。

レナール氏は繰り返し感情の高ぶりを見せており、モノローグの冒頭では「怒りから、涙が目に溢れた」（178）とあり、二通目の匿名の手紙を夫人から渡される際には、「狂おいしい目つき」（182）をするに至る。この感情の高ぶりは、夫妻の対話が始まって以降は夫人の冷静さと際立った対照をなす。二通目の匿名の手紙に動揺したまま、ジュリヤンを解雇することを夫人から提案されると、レナール氏は震えた声で叫ぶようになる（183）。

レナール夫人は、そのまま言わせておいた。すると夫は、ずっと続けるのだ。土地の言い回しでは、「怒りをぶちまけた」というわけだ。[…]

レナール夫人は、この辛い会話の間中、ずっと揺るぎのない冷静さを保った。
(184)

夫が夫人に対する「侮蔑的な考え」（184）を表明しようとも、夫人は耳を貸さないことで応じる。レナール氏自身「平静さ」（184）を取り戻す瞬間は確かにあるものの、エリザとヴァルノの関係を知るに及ぶと「おれの知らないことが、おれの家でおきているのか」（185）と、「主人」としての尊厳が傷つけられて「憤怒」にとりつかれる（185）。

こうして間歇的に表出する怒りの発作は、言葉による暴力に留まるわけではない。ヴァルノが夫人に言い寄っていたことを知り、その証拠として手紙が存在していることを知ると、レナール氏はここぞとばかり果敢に行動する。

「[…] 手紙はどこにある？」

「私の書き物机の引き出しです。たけど、鍵はお渡ししませんよ。」

「壊してやる」、と妻の寝室に駆け込みながら叫んだ。

実際、鉄の杭をつかって、バリから取り寄せた木目のはっきりしたマホガニーの高価な書き物机を壊した。なにか汚れがあるように思った時は、上着の裾でしばしば拭いたのだったが。（186）

この破壊行為の結果をレナール夫人の視点から確認すると、次のようになる。破壊されたのは書き物机だけではなかったことが明らかになる。

自室に戻ったレナール夫人に、危険という感情が激しく呼び醒まされた。部屋の雑然とした状態に衝撃を受けた。小さな美しい小箱はどれもが鍵穴を壊されていた。床の寄せ木が持ち上げられたものもいくつかあった。私に対しても、お情けは見せなかったことでしょう！、と思った。大切にしている、色をぬつ

た寄せ木のこの床を、こんな風に台無しにするなんて。こどもが、濡れた靴を履いたまま入ろうものなら、真っ赤になって怒るのに。これでは台無し、取り返しがつかないほど！（189）

こうして「暴力」（189）の結果を目の当たりにすることで、夫人は自分が直面していた「危険」の大きさに気が付く。殺害を含む暴力行為を検討した夫は、ようやく実際の行動として、夫人の寝室の家具と調度品を破壊するに至る。書き物机にしろ床にしろ、それまで大切にしていたという注記は、衝動的なこの破壊行為がレナール氏の本来の行動原則から大きく外れていることを示している⁴¹。

破壊行為の結果を目撃するレナール夫人の視点に次いで、語り手が介入し、レナール氏による暴力をいかように理解したらよいのか提示する。

後宮のオダリスクは、全力でスルタンを愛したとしても、スルタンは全能であり、彼女がごまかしを駆使してスルタンの権威を掠め取れるなどという希望は一切もてない。主人による復讐は、恐ろしく血なまぐさいものの、軍人のようで鷹揚である。短刀がすべてを終わらせるのだから。（189）

後宮の女とスルタンの関係に、夫人とレナール氏の関係が重ねられる。この比較は一見突飛にみえるものの、スルタンとレナール氏の「主人」としての立場によって導かれている。引用にはスルタンを指す語として「主人（*maître*）」が読まれるが、この語は第21章の表題「主人との対話」にも含まれており、レナール氏は「一家の主（*maître de maison*）」（187）である。この共通点にも関わらず、レナール氏は専制君主たるスルタンが後宮においてするようには振舞わない。すでにみたように、血の考えに怖気づき殺害の意図をあっさりと捨ててしまった夫は、短刀で「すべてを終わらせる」ことなどできない。

スルタンとレナール氏の違いをよりはっきりとさせるために、スタンダードルが、権力をもつ男性が振るう暴力について注意を向けていたことに注目したい。姦通の疑惑ゆえに妻の殺害にいたるオセローについて、スタンダードル

⁴¹ この場面もまた、ボーマルシェによる戯曲ならびにダ・ポンテ＝モーツァルトによるオペラ『フィガロの結婚』に基づいていることが知られている。松原雅典、『『赤と黒』の解剖学』、前掲書、32-33頁；Matsubara Masanori, « Les Noces de Figaro et Le Rouge et le Noir », art. cit., p. 51.

は『ロッシーニ伝』（1823年）のなかで論じている⁴²。シェイクスピアの悲劇と比較して、ロッシーニのオペラ『オテロ』（1816年）は愛を語るのに失敗しているというのだが、その根拠としてスタンダールが挙げるのは、夫が妻の殺害に至る過程の違いである。

オセローの不幸が私たちを感動させるためには、オセローがデスデモーナを殺すのにふさわしいと私たちが感じるためには、観客がふとオセローについて思いを馳せる時に、愛する人の死後、独りで生きることになったオセローが、ほどなく同じ短刀で自らを突き刺すに違いないということをいささかも疑ってはいけないのである。自分の心の底にこのことの確信が見つからない場合、私は、オセローにヘンリー八世しかみることができない。ヘンリー八世は、当時の法廷のたしかに公正な判決にしたがい妻の一人の首を刎ねさせた後にも、ますます陽気でいられるのである。自分を愛してくれる女を悲しみのあまり死なせては楽しむ、今日の色男気取りのようなものである⁴³。

もしもオセローが妻に対して抱く愛が真率であるように描かれていたのならば —— 「ウェルテル風のアムネ」にとりつかれていたのならば⁴⁴ ——、たとえデスデモーナの殺害に至るとしても、その行為は愛と嫉妬に由来するもので、愛の証明となるはずだ。ところが、単なる傲慢さの現れでしかない殺害があり、ロッシーニのオペラにおけるオセローはそちらに分類されるという。生涯で六度の結婚をしたことで知られるヘンリー八世は、二番目の妃アン・ブーリンと五番目の妃キャサリン・ハワードを処刑で失っている。このイングランド王の場合、妻を刑死で失うことは、真率な愛情を再確認する機会であるどころか、自らの権力による支配を示すための、そして支配を楽しむための機会のひとつでしかない⁴⁵。同時代の「色男気取り (fat)」にヘン

⁴² この点について、次の箇所を参照した。杉本圭子「嫉妬という病」、前掲論文、17-18頁。

⁴³ Stendhal, *Vie de Rossini*, éd. Pierre Brunel, Gallimard, coll. « Folio classiques », 1992, p. 242.

⁴⁴ *Ibid.*, p. 241. オペラ『フィガロの結婚』のアルマヴィーヴァ伯爵の感じる嫉妬もまた、「傷ついた虚栄心」によるのではなく苦悩によるもので、観客の心を打つような感情であるとされる。（*Ibid.*, p. 245）もっとも、スタンダールがここで言及する伯爵のアリアは、フィガロの婚約者スザンナへの横恋慕を示すものであり、伯爵夫人に対する嫉妬 —— レナール氏の破壊行為のモデルとなった箇所 —— ではない。

⁴⁵ 夫が妻に対して振るう暴力についての次の記述は、スタンダールが説明するヘンリー八世型の暴力を説明しているように思われる。夫によって夫婦間暴力がふるわれるのは、「自己の支配を確実にするためではなく、まさに自己のため、自己の権力、男らしさを確かめるため、自己の能力を自分に証明するためである」（Fabrice Virgili, « Virilités inquiètes, virilités violentes », dans *Histoire de la virilité*, t. III, *La Virilité en*

リー八世型の残酷さを見出すスタンダールは、『赤と黒』の語り手が伝える後宮の女に対して果敢に復讐を果たすスルタンを、同じくヘンリー八世の型とみなすに違いない。一方、暴力の執行をためらうレナール氏は、権力の行使を楽しみながら残酷な復讐の論理を体現するこのようなモデルからの距離を示している。

結論 『赤と黒』とその後

姦通の疑いを抱えたレナール氏の胸中に、複数の解決策が去来する。真相の探求を行うことから、根拠もなく疑いを捨て去ることまで、さまざまな選択肢のなかに暴力と死の影が差す解決策もある。しかし、こうした「男らしさ」を示す手段に対してレナール氏は距離をとる。具体的な行動に対するレナール氏の態度は、それ自体として滑稽を示す未決定、先送り、優柔不断によって特徴づけられる。スタンダールにおける「男らしさ」を特徴づける形象としてイタリアの「盗賊 (brigand)」が知られているが⁴⁶、この形象は『赤と黒』においてはルネサンスへの言及とそれに重ね合わせられるジュリヤンやマチルドによって担われている⁴⁷。「寝取られ亭主」が証明するに至ることのない「男らしさ」が、異なる人物によって体現されているようだ。

このようなレナール氏の態度に時代の刻印を読み取ることができるのは、殺害にせよ他の手段にせよ、なんらかの暴力の発露よりも評判と金銭への配慮が優先される点においてである。「On」に囲まれていると感じ、評判と世論を何よりも恐れるレナール氏において、殺害すべきという倫理は後景に引き下がる。そもそも、姦通の疑いを根拠に殺害が要請された時代、それが当たり前であり事例に事欠かなかった過去では、もはやない。殺害というアイディア自体は確かに存在し、刑法もまたその実行を許容するものの、このよ

crise ?, Seuil, 2011, p. 83 ; ファブリス・ヴィルジリ「不安な男らしさ、暴力的な男らしさ」、前掲論文、121頁）。

⁴⁶ Xavier Bourdenet, « Le brigand héroïque : virilité, loi, pouvoir », dans Daniel Maira, Jean-Marie Roulin (dir.), *Masculinités en révolution, de Rousseau à Balzac*, op. cit., p. 311-330.

⁴⁷ Daniel Maira, « L'énergie virilisante de la Renaissance dans *Le Rouget et le Noir* », dans *Lectures de Stendhal. Le Rouge et le Noir*, op. cit. p. 121-136. 「男らしさ」が女性人物——ここではマチルド——によって担われることは、なんら問題でない。「男性性 (masculinité)」とは違い「男らしさ (virilité)」は、男性によっても女性によっても追及され得ることについては次の箇所を参照。Daniel Maira, Jean-Marie Roulin, « Constructions littéraires de la masculinité entre Lumières et Romantisme », art. cit., p. 19.

うな殺害を世論が支持するわけではなさそうである。何もしなければ滑稽であるが、殺害を行えば悲劇であるというレナール氏の分析からは、「男らし」振舞いである殺害を果たして行すべきなのかという点における時代の迷いが読み取られる。

妻の部屋を破壊する行為は、こうして実行されなかった殺害を代替する。とはいえ、衝動にかられてなされたこの行為をもって「男らしさ」が発揮されたとはみなされ得ないだろう。「男らしさ」とは、自身が帰属する男たちからなる集団によって承認されることを必要とするが⁴⁸、カジノの集団を背景に想定されたヴァルノとの決闘がそのような承認を前提としていたこととは異なり、レナール氏による妻の寝室を破壊する行為はそのよう前提をもたない。一方、語り手によれば、レナール氏による家庭内の破壊行為は、権力をもつものの傲慢から説明される暴力とは異なるとされる。後宮のスルタンを例に示されたヘンリー八世型の暴力はもっぱら権力の確認を目的とし、その点においてドン・ジュアンを想起させる⁴⁹。スタンダールによればドン・ジュアンの本質とは「世論に歯向かう」ことにあるのだから⁵⁰、自らの住む町での評判と世論を重視するレナール氏はこのモデルの対極に位置する。

姦通と殺害をめぐるレナール氏の迷いの特徴は、『赤と黒』における他の人物と比較することで一層明らかになる。同じ姦通をめぐるレナール夫人が取り憑かれた煩悶と比べてみよう。修道院で教育を受けた夫人は、姦通を犯しながら天上を見つめ、神罰を恐れる。迷信深さは修道院での教育の哀れな成果ともいえようが、物語の構成から見れば、この設定は感情の起伏を小

⁴⁸ Cf. 「男らしさは、その本質である暴力性において（暴力は現実でも潜在的でもかわらない）、ほかの男たちから有効と認められ、「本物の男たち」がつくるグループへの帰属の承認によって証明されなければならない。」（Pierre Bourdieu, *La Domination masculine*, Points, coll. « Essais », 2002 [1998], p. 77 ; ブルデュー『男性支配』、坂本さやか、坂本浩也訳、藤原書店、2017年、79頁）

⁴⁹ 2017年以降の#MeTooの発端となったハリウッドのプロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインの動機について、「自分の権力を享受する喜び」としてドン・ジュアン型と類型化することができる（Raphaël Liogier, *Descente au cœur du mâle*, Les Liens qui libèrent, 2018, p. 17 ; ラファエル・リオジエ『男性性の探求』、伊達聖伸訳、講談社、2021年、16頁）。

⁵⁰ スタンダールは『チェンチー族』（1837年）において、近代の宗教と政治——具体的には、16世紀の反宗教改革以降のカトリックとそれに結びついた王政——が近代のドン・ジュアンを生んだとしながら、ドン・ジュアンの本質を「世論に歯向かうこと（braver les opinions）」としている。Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. II, éd. Yves Ansel, Philippe Berthier, Xavier Bourdenet, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 1124.

説で表現するために不可欠なものである⁵¹。垂直方向の基準から判断する夫人の崇高な姿に対して、あくまでカジノに代表される評判という水平方向の基準に拘泥するレナール氏との対比は明らかである。とはいえ、姦通の疑惑をめぐって呻吟するレナール氏の姿を、滑稽としてのみ読解すべきなのかという疑問も生じる。『赤と黒』において、貴族のレナール氏よりもブルジョワのヴァルノが過度に誇張されて滑稽なものとして描かれていることが指摘されている通り⁵²、モノローグを与えられることもなく間接的な言及の積み重ねによって戯画化されるヴァルノに対して、本章において長大なモノローグが与えられたレナール氏は著しい対照を示す。『パルムの僧院』（1839年）第1巻第7章において、これも同じく匿名の手紙をきっかけとしてモスカはファブリスに対する嫉妬に悩み、この恋敵の殺害を考えるに至る。その場面において、モスカは、レナール氏と同様長大なモノローグを通して内心を吐露する。オペラにおいてアリアがどの人物に配置されているのかが重要であることを思い起こさせるかのように⁵³、「寝取られ亭主」役の彼らに与えられたモノローグという舞台は、彼らの煩悶が、笑われるべき「寝取られ亭主」という単なる類型をはみだすものであることを示している。

姦通、殺害、19世紀

『赤と黒』と同年の1830年に発表された論考において、ジュール・ジャンソンは、小説を詳しく要約するなかで匿名の手紙について考察するものの、レナール氏の煩悶については一切言及しない⁵⁴。1832年にスタンダール自身が

⁵¹ Philippe Berthier, « Dieu, la femme, le roman », dans *Stendhal. Littérature, politique et religion mêlées*, Classiques Garnier, 2011, p. 211.

⁵² 「レナール氏は滑稽な姿をいくらか示してしまうかもしれないが、ヴァルノのようにグロテスクなわけではない。」（Yves Ansel, *Stendhal littéral. Le Rouge et le Noir*, Kimé, 2001, p. 179）「スタンダールがとりわけ貴族に気をつけているというわけではないものの、ヴァルノたち〔中略〕は、彼らの向かいにいる貴族たちよりも明らかに誇張されている。」（*Ibid.*, p. 182-183.）

⁵³ たとえば、オペラ『フィガロの結婚』ではアリアや二重唱の他、複数の人物のかけ合いが聞かれるが、それは王侯貴族のアリアが連続するオペラ・セリアとは異なるブッフアのジャンルに属していることを示している。岡田暁生『西洋音楽史 「クラシック」の黄昏』、中公新書、2005年、115-120頁。なお、『パルムの僧院』におけるモスカのモノローグをはじめとしてスタンダールの小説作品にオペラのアリアを読み取ることについては次の論文を参照した。Philippe Berthier, « Les grands airs de *La Chartreuse de Parme* », *Littératures*, n° 35, 1996, p. 101-107.

⁵⁴ 「レナール氏はこうしてヴァルノから匿名の手紙を受け取る。レナール氏は激怒し、レナール夫人は涙を流し、ジュリヤンが出ていくことになる。」（Stendhal, *Œuvres romanesques complètes*, t. I, op. cit., p. 816.）

自作を要約しながら紹介する論稿においても、「寝取られ亭主」の悩みは「この夫の嫉妬」という一言で済まされている⁵⁵。他の場面への言及、たとえば、姦通の露見の後にジュリヤンが向かうブザンソンの神学校の場面については、自作の要約においても、「習俗を描写するものとしてこの小説の秀でた個所は、神学校でのジュリヤンの日々である」と記したほか、その場面を含む第29章について「ヴェリー・ウェル (very well)」と繰り返し記している⁵⁶。

『フィガロの結婚』をはじめとしたさまざまな文学的記憶に支えられたレナール氏の嫉妬は、同時代の読者にとっても作家自身にとっても、新規性もなくさほど興味を惹く対象ではなかったのだろうか⁵⁷。

実際、本稿の冒頭で参照したタナーは「多くの19世紀小説がほとんど必然的とも思えるほどに、姦通を犯す女性に焦点を当てているという事実」⁵⁸を指摘している。姦通の三角形における最も滑稽な立場は、おそらく最も密やかな場におかれているのだろう。そこにいま一度光を当てることで、『赤と黒』という一作品、そしてスタンダールというひとりの作家を離れ、19世紀フランスにおける「寝取られ亭主」の「男らしさ」という主題の重要性を指摘できよう。

『ボヴァリー夫人』(1856年)において、エンマの姦通を知ったシャルルの反応はどうだろうか。エンマを亡くしたあとにロドルフからの手紙を見つめるものの、あえて真相の追及を行わない。一方、レオンの手紙が見つかるのと平静さを失い、手紙と妻の愛人の肖像が隠されていた箱を踏みつぶすに至る。この衝動的な行為には家具調度品を破壊したレナール氏と同様の暴力の発露を読み取ることができよう。しかし、ロドルフに対面する機会をもっても詰問すらしないシャルルは、復讐など考えるはずもない⁵⁹。シャルルにお

⁵⁵ *Ibid.*, p. 833.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 1054. 1831年と1835年の日付のメモ。神学校については、次の論稿を参照。Philippe Berthier, « Very well le séminaire », dans *Espaces stendhaliens*, *op. cit.*, p. 217-228.

⁵⁷ 『赤と黒』をめぐる同時代の評において、第21章の顛末に比較的紙面を割いているものとして、1831年1月26日付の『ル・タン』紙に掲載された記事がある。夫妻の対話を主に夫人の視点から説明しながら、「これらすべては繊細で真実である」と肯定的な評価によって段落を結んでいるものの、レナール氏の激情と暴力についての言及はない。Michel Crouzet et al., *Stendhal*, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, coll. « Mémoire de la critique », 1996, p. 78.

⁵⁸ Tony Tanner, *Adultery in the Novel*, *op. cit.*, p. 13. トニー・タナー『姦通の文学』、前掲書、33頁。

⁵⁹ エンマの死後シャルルが真実を知り死に至る過程が、愛とイロニーに彩られていることについて次の論文を参照した。松澤和宏「シャルルの変貌をめぐって —— 『ボ

いて、殺害という発想も他者や評判へのこだわりも不在なようである。姦通が露見した際には妻はすでに亡くなっているというシャルルの状況は、進退窮まったレナール氏が抱く願望——自ら手は下さなくても夫人が亡くなっていればよいのに、という願望——が実現した状況ともいえよう。

『赤と黒』にせよ『ボヴァリー夫人』にせよ、着想において実際に起きた姦通事件を下敷きにしていることがしばしば語られるが、とある姦通事件が巻き起こした論争を通して、「寝取られ亭主」の「男らしさ」をめぐる19世紀フランスのモラルが揺れていた状況が描き出される⁶⁰。1872年、パリ・コミュンから一年経過したパリで、一見凡庸で三面記事的な事件とその裁判が話題を集めた。ヴァンドームの近くヴィリエに土地を所有するアルチュール・ルロワ＝デュブルは、四才年下の妻が自分の親友と不倫関係にあることを知ると、パリにおいて不倫の現場を取り押さえる。愛人は逃げおおせるが、逆上した夫によって妻は殺害される。すでにレナール氏のモノローグにおいて検討したように、刑法第324条に基づき、このような夫の行為は罪に問われないはずであった。ところがこの事件が耳目を集めたのは、裁判の結果、夫に5年の刑が言い渡されたためである。

1872年7月6日、『ル・ソワール』紙で、アンリ・ディドヴィル (Henry d'Ideville) は、夫は妻を許すべきであったと論じ裁判の評決を支持する。それに対して、デュマ・フィスは、『男・女』(1872年)と題され、副題として「アンリ・ディドヴィルに対する返答」をもつ論争文章を発表する⁶¹。このパンフレは、7月から12月の半年間で35版を重ねたという。177頁からなるこの冊子の末尾で、デュマ・フィスは、21歳になる息子がいたならばこう話しかけるだろうという体裁をとりつつ、結婚をするのに両親の同意が必要とされない25歳までの4年間に学ぶべきこととして「女性の導き方」を伝えようとする。そして妻が裏切るようなことがあれば、そのような妻は、「妻でもなければ、女でもない、つまり、神によってつくられたものでもない。

ヴァリー夫人』における愛と赦しとアイロニー」、『フローベール 文学と〈現代性〉の行方』、松澤和宏、小倉孝誠編、水声社、2021年、47-63頁。

⁶⁰ この論争については次の論文を参照した。Odile Krakovitch, « Misogynes et féministes, il y a cent ans (I). Autour de *L'Homme-Femme* d'Alexandre Dumas fils », *Questions féministe*, n° 8, mai 1980 ; Marie-Catherine Huet-Brichard, « Les arguties d'un moraliste : *La Femme de Claude* d'Alexandre Dumas fils », *Fabula / Les colloques*, Les moralistes modernes, URL : <http://www.fabula.org/colloques/document1296.php>, page consultée le 24 mars 2023.

⁶¹ Alexandre Dumas-fils, *L'Homme-femme. Réponse à M. Henri d'Ideville*, M. Lévy frères, 1872.

単に動物なのであって、ノドの地の雌猿であって、女のカインである。殺せ（tue-la）」⁶²と結論づける。

この事件をめぐる論争の余波は『男・女』出版以降も続き、翌年の 1873 年 1 月に初演されたデュマ・フィスの戯曲『クロードの妻』では、姦通を犯した妻を殺すべきなのかという問いが扱われる。また、この論争にはゾラも関わっていたことが知られており、1872 年 7 月 18 日に『ラ・クロッシュ』紙に発表された記事「デュマ・フィス、モラリスト」において、ゾラはデュマ・フィスを批判している⁶³。

けれども、この論争の余波として最も注目すべきなのは、19 世紀を代表する姦通を主題とした小説『アンナ・カレーナ』（1877 年）であろう。1872 年、『アンナ・カレーナ』の執筆にあたっていたトルストイが、デュブル事件にまつわるデュマ・フィスの論争について関心を示していたことが知られている。1873 年 3 月 1 日に、クズミンスキー夫人に宛てた書簡において、トルストイはデュマ・フィスの『男・女』を挙げながら「私はこの本にうたれました⁶⁴」と言及している。さらには、第 4 部第 9 章から始まるオプロンスキー家での会話において、女性の教育と権利が話題にされるが、草稿においてはデュマ・フィスの『男・女』が言及されていた。

ロマノフ朝下、1870 年代のペテルブルクとモスクワの絢爛たる社交界を舞台にする姦通事件と、1830 年前夜のフランシュ＝コンテ地方の「小さな町」を舞台にする姦通事件。背景となる舞台の違いにも関わらず、いくつかの共通点は、両者が同じ世紀に属していることを証しだてるかのようだ。嫉妬という言葉の前にいかにすべきか悩むカレーニン（第 2 部第 8 章）、同時代の上流社会において裏切られた夫の実例を羅列したうえで、決闘——これはすぐに選択肢から外される——や離婚といった解決策を検討するカレーニ

⁶² Alexandre Dumas-fils, *Dossier, « Tue-la », constitué, étudié et plaidé par André Lebois*, E. Aubanel, Avignon, 1969, p. 134. なお、「ノドの地」とは、『旧約聖書』においてカインが弟アベルの殺害の後、放浪の末に行き着いた場所である。

⁶³ Zola, « Dumas fils, moraliste », *La Cloche*, 18 juillet 1872. 姦通がゾラにとって大きな関心の対象であったことは、1881 年に『フィガロ』紙に発表された記事「ブルジョワジーと不倫」（Zola, « L'adultère dans la bourgeoisie », *Le Figaro*, 28 février 1881 ; ゾラ『時代を読む 1870-1900』、小倉孝誠、菅野賢治編訳、藤原書店、2002 年、20-29 頁）などからも窺い知れる。

⁶⁴ トルストイ『アンナ・カレーナ』、下巻、木村浩訳、新潮文庫、2012 年、669 頁（「解説」）。『アンナ・カレーナ』と『男・女』については、『アンナ・カレーナ』、第 4 巻、望月哲夫訳、光文社新訳古典文庫、2008 年、378 頁（「解説」）でも言及されているほか、次の個所を参照。Boris Eikhenbaum, *Tolstoi in the seventies*, translated by Albert Kaspin, Michigan, Ardis, 1982 [原著 1940] , p. 100-105.

ン（第3部第13章）、自分が関与しない形で妻の死を願うレナール氏の願望に沿うかのように、アンナは産褥で死の危機に陥り（第4部第17章）。貴族の男たちが飲食と賭博とお喋りにふけるために出入りするクラブは（第7部第7章）、ヴェリエールならばカジノにあたるだろうか。カレーニンを通してレナール氏が透けて見えるこうした瞬間があることは、『赤と黒』を出発点にして「寝取られ亭主」をめぐって19世紀文学の名作を再読することの可能性を示している。